

令和元年6月6日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03940

研究課題名(和文) 子ども・若者の貧困とその経験：社会的文脈を組み込んだ分析視角から

研究課題名(英文) Experience of Childhood and adolescent Poverty - From the viewpoint of a social context

研究代表者

大澤 真平 (OSAWA, Shinpei)

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：70598549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1.研究視角である社会的文脈を組み込んだ貧困分析のひとつとして、ジェンダー視点を組み込んだインタビュー調査を実施した。2.国内外の研究を検討し、子どもの貧困を分析する視点として「子どもの貧困の経験」を理論化する試みを行った。3.貧困にある若者の生活実態調査(勤労者調査、求職者調査、学生調査)を実施し、子ども期から若者期への貧困の影響を連続的に把握した。これらの調査研究を通じて「貧困の世代的再生産」の実態を「子ども・若者の貧困の経験」と「ライフコース」の観点から具体的に把握することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究全体を通じて、これまでの子ども・若者の貧困に関する調査研究と比較して、より具体的な生活実態、家族の持つ資源や資本のあり方、ジェンダー規範の影響、社会保障制度や社会福祉サービスとライフコースとの関連を捉えることができた。また、その生活をどのような経験として受け止めているのか、そのことが個々人の人生の選択とどのように関連しているかについて明らかにすることができた。総じて研究の目的であった貧困の世代的再生産における当事者理解をすすめることに一定の貢献ができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this research, (1) I executed the interview investigation of the young person of poverty from the viewpoint of gender. (2) Japanese and English literature was examined, and I did the attempt to construct the frame to analyze "Experience of child's poverty". (3) To understand the influence of poverty from the child period to the young person period, I executed the young person life survey of actual living conditions (worker survey, jobseeker survey, and student survey).

Through these researches, I was able to understand the realities of "Reproduction of Intergenerational poverty" from the viewpoint of "The child's experience" and "Life course".

研究分野：教育福祉論

キーワード：貧困の世代的再生産 子ども貧困 若者の貧困 ジェンダー 貧困の経験

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本においても「子どもの貧困対策法」が成立し、どこにどのような対策をとることが貧困の世代的再生産の緩和・解消につながるのか、その実態解明がこれまで以上に求められている。しかし、親世代の持つ資源・資本の不利・不平等が、どのように子ども世代の不利・不平等に転移していくのかははまだ明らかとは言えない。このプロセスについては先行する欧米の大規模パネル調査がその関連する要因を明らかにし、それに対する支援策も整備してきているが、なお貧困の世代的再生産の断ち切りには成功していない。そのため、現在では客観的な生活状況の把握に加え、当事者の主体性を質的調査から明らかにする必要性が指摘されている。日本においてもようやく厚生労働省による 21 世紀出生児縦断調査などの大規模パネル調査が始まったが、同時により具体的な日本の社会的文脈の中で当事者理解を深めることが求められている。本研究はこの当事者理解に関する研究分野の発展という課題に位置づけられる。

貧困の世代的再生産に関して、歴史的には「貧困の文化」論や「貧困のライフサイクル」といったとらえ方がなされ、客観的な事実が把握されないままにその議論がなされてきた。しかし、90 年代後半には欧米における大規模なパネル調査の結果が示され、いつ、だれが、どれくらいの期間、どの程度の貧困に置かれているのか、あるいはその経験は継続的というよりは断続的であるといった事実が明らかになった。子どもの貧困に関しても、より幼少期に貧困に置かれることがのちの大人世代にもっともダメージを与えるということが明らかになった。しかし、パネル調査が進化した欧米においても、具体的な社会制度や文化モデルといった社会構造のなかで、個々人の主体的なあり方がどのように貧困の世代的再生産に関与しているのかは明らかとはなっておらず、なお貧困の世代的再生産の断ち切りには成功しているとは言えない状況にある。

他方で、貧困の世代的再生産のプロセスではなく、家庭の生活実態を把握し子どもが育つ条件を整える方向性を模索する研究もなされている。たとえば、ユニセフの報告(2007)「子どもの貧困-豊かな国における子どものウェルビーイング」においては、経済的な状況だけではなく、医療・安全、教育、社会関係、リスク行動、主観的ウェルビーイングの状況についての国際比較がなされている。こういった研究は貧困を多元的に把握し、子どもの育ちの条件を保障する社会のあり方を問う点で重要である。しかし、それは一方で個々の家庭における家族資源・資本の不平等や欠如、そのなかでの具体的な子どもの生活のあり方や意識の問題を十分にとらえることはできない。また、国際比較においてはそれぞれの社会的文脈が十分に考慮されないこと、また相対的剥奪の観点は当該社会の社会的合意と切り離せないことから、やはり日本における貧困世帯の生活実態を把握する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では貧困の世代的再生産の実態を、あらためて子ども・若者の生活と経験から明らかにすることを目的とする。

その際、個人と構造の関係性を分離せずにとらえるため、社会の構造や文化モデルによって貧困にある当事者の選択と行為が一方向的に決定されるといった見方ではなく、それらからどのような影響を受け、そして自分自身の生活(そこには自身の願望や目標も含まれる)をどのように形成していくのかに注目する。それは福祉政策や教育政策の能動的な利用者として、また、文化モデルを再構築していく生活者として人々を理解しようとする視点である。この観点をを用いることで、社会福祉学の立場から子どもの貧困問題への社会的介入と支援のあり方を考察する立場に立つことになる。そのうえで、ライフコース研究の視点である、個々人の願望、物質的・人間的な資源、外的な機会と制約によって形成される「個人の人生の軌跡」のなかに、具体的な制度・政策や文化モデルの影響を組み込んで個人の生活と経験を明らかにしていく。

3. 研究の方法

本研究では次の三つの方法により、研究目的を追求していった。

(1) 「若者期の移行および家族形成に関するインタビュー調査」

調査は子ども期に貧困にあった 30 代前半の若年女性 4 名を対象に実施。対象者は 2007 年に実施した子ども期の貧困経験に関するインタビュー調査から 10 年来継続して関わりを持ちながらヒアリングを行ってきた女性たちである。家族資源・資本の不平等を基本的な背景としてとらえながらも、特にジェンダーに焦点を当て、新たな視点として離家規範への対応、若者世代のライフイベントに対する家族資源のあり方、保育制度と就労の関係、子育て規範、ひとり親(特に母子)世帯政策等の構造・文化モデルの影響を考慮して、貧困にある世帯に育った若者の、学校から社会への移行期後における人生の軌跡の選択過程の内実を把握した。

(2) 子どもの貧困の経験を把握する研究枠組みの理論的な構築を試みた。研究は主にイギリスの「子ども中心の視点」研究を重ねてきたテス・リッジの先行研究を中心に、国内外の貧困におかれた子どもに対する質的調査のレビューを踏まえ、子どもの貧困の経験研究の課題を明らかにした。

(3) 「若者生活実態調査(勤労者調査、求職者調査、学生調査)」

調査は平成 30 年 10 月から 12 月にかけて、北海道内の若者を対象として実施した。勤労者調査は経済団体、労働団体など関係機関の協力のもと、概ね 39 歳以下の勤労者を対象にウェブアンケートとして実施。求職者調査は北海道内 6 箇所のジョブカフェ利用者に調査票を配布し、郵

送にて回収した。学生調査は四年制大学および短期大学あわせて12校に調査用紙の配布回収を依頼した。

4. 研究成果

(1) 移行期及び家族形成に関するインタビュー調査では、生育家族内に留まるケース、稼働所得による単身「自立」を果たしたケース、結婚により離家を果たしたケース、福祉サービスによる「自立」のケースと、女性のライフコースとして特徴的な4つのケースが把握された。

調査結果の分析から見出された主な結果はつぎの2点である。ひとつは「包括的なライフコース選択と生活基盤の現実」である。若年者のライフコース研究では仕事、家族、居住に関する個々のライフイベントの社会的条件に焦点が当たりがちだが、事例から見えてきたのはそれらの組み合わせのなかでの包括的なライフコースの選択であった。どこに住むか、誰と住むか、いつ仕事をするか、どのような仕事をするか、そういったことは単独の希望で選択されることはなく、生活と他者との関係の状態が複合的に条件として絡み合う中で、選択肢のない「選択」としてライフコースの軌跡が描かれていた。

そのなかで、親の生活保護や夫婦の障害者年金といった社会保障制度が貧困にある若年女性を支える機能を果たしていた。また、これまでも見られた貧困にある家族や親族が相互扶助的な関係や依存的な関係を形成する中で貧困に対してある種の防衛的な対応をしてきたあり方が、他に経済的な基盤を作る方法がない中で、限られた選択肢として「選択」されたケースもあった。既婚のケースにおいては男性の労働を通じた性別役割分業に基づく「安定的な家族」として生活をしているケースもあったが、家庭内で貧困に置かれ尊厳と自由が奪われていた。

もうひとつは、「ケア役割とライフコース選択」の関係性である。雇用の不安定化を背景に若年女性の貧困が問題視されているが、若年女性のライフコースの「選択」と生活の不安定化は、むしろケアとの関係で生じている側面が強かった。生まれ育つ家族にしろ新たに形成する家族にしろ、彼女たちにはケアをしなくてはならない対象が常に存在し、ライフコースの選択は他者との関係性のなかで決定されていくことになっていた。個別の利益や目的のみに基づいた合理的選択というよりは、他者との関係性のなかでライフコース「選択」を行ってきたと言えるだろう。これまでどちらかという若者の自立は就労による経済的自立を前提に個人の達成課題としてとらえられ、その選択は若者個人の就労や離家や家族形成の問題に還元されてきたが、貧困にある若年女性の自立を考えた時、ケア役割と家族の問題を切り離して考えることはできないことが示された。

これらの結果をふまえると、生まれ育つ家族の不利と困難は持続的に若年女性のライフコースに影響を与え、次世代形成の基盤をも不安定化させているという点からも、「子どもの貧困」や「若者の貧困」への対応は、その家族の生活にソーシャルワーク的に介入し支えることが重要であると考えられる。また、単純な経済的「自立」を想定した若年女性の自立、成人期への移行という議論ではなく、若者に対する就労支援や自立支援のなかで、当事者が抱えるケアを必要とする人々に対する対応をどれだけ含めていけるかについて考えていく必要が見出された。

(2) 子どもの貧困の経験を把握する研究枠組みの理論的な検討で明らかになったことは、子どもの声を聴く研究はいかに貧困が継承されるのかというプロセス論ではなく、剥奪された子ども期の生活の積み重ねそのものが貧困の世代的再生産に結びつくという立場に立つということであった。貧困の世代的再生産のプロセスは、子ども期からの生活の積み重ねを包括的にとらえることの難しさと、合わせて、エスピン＝アンデルセンが述べるようにそのメカニズムは家庭の経済的資源、親の時間投資、家族の学習文化等が複雑に関係しているとすれば、実際にはその解明は困難である。それに対して子どもの声を聴く研究は、環境としての家族を背景に置きつつ、子ども期から充実した人生を送る基盤を整え、子どもの権利を実質的に実現する中でライフチャンスをとらえる視点であった。

子どもの貧困の経験という視点は、後者の観点から貧困の世代的生産の解消・緩和という課題に応える研究と位置づけられる。しかし、ライフチャンスの不平等を子どもの視点からとらえるには、明らかに課題が残されていた。経験は個人が行為や選択を行う前提となる生活の評価や社会の認識、自分自身をどう存在として位置づけるか、あるいは選択肢の確からしさへの確信といったものを形成する。貧困にある子どもの経験を考える時、子ども自身が自分をどのように社会との相互作用の中で認識するのかを理解する必要があるし、そのことが子どもの行為や選択にどのような影響を与えるのかを明らかにすることが重要な視点になる。

子どもの貧困の経験という視点は、物的基盤に基づく子どもの生活に対する認識をとらえる視点であり、それが象徴的・関係的な側面に与える影響を理解するだけでなく、子ども自身のアイデンティティを通じた行為や選択に与える影響を理解する視点ともなる。それはあくまでも子どもの側から世界を理解する視点であり、子どもが主体的に生きていく中で選択の幅や不利の積み重なりを明らかにすることで、子ども・若者に対するソーシャルワーク的支援のあり方についての知見も得られるだろう。

これまでの日本における貧困の世代的再生産研究は、親世代の貧困・不平等が次世代へ転移される状況、そしてその構造要因（特に家族主義的な社会政策やイデオロギーのあり方）を示してきた。また、その中で貧困からの脱出を図る個人や家族の格闘として見た場合の、自由・権利・機会・資産・所得・自尊心といった「基本財」の不足や欠如と、自立に必要な雇用や教

育を手に入れるケイパビリティの欠如を明らかにしてきた。子どもの貧困の経験の視点は、これらの研究の知見をもとにしつつ、しかしこれまでの家族の側からは見えてこなかった子どもの側から子どもが貧困のなかに生活することの意味と影響を描くことができる視点となりうると考えられる。

(3)「若者生活実態調査(勤労者調査、求職者調査、学生調査)」は、ここでは関連して学生調査の奨学金利用者の概要のみ報告する。奨学金利用の有無で学生生活実態を確認すると、アルバイト理由として「趣味や付き合いのため」は差が見られないが、「生活費のため」「学費のため」「家族を支えるため」といった項目にははっきりと差があり、奨学金の利用は授業料に留まらない用途で利用されていた。また、「現在の暮らし向き」や「実家からの仕送りの有無」「仕送りの額」にも差があり、「奨学金を返済する負担感」の重さとあわせて考えると、これらは将来的な社会生活へのスタート時における不平等の背景になるだろう。また奨学金利用者は、入学以前の段階において「経済的な理由で当初の進学先をあきらめる」ことや、「経済的な理由できょうだいは進学をあきらめたり変更した」と答える割合も高く、学費負担の重さは単に進学機会を制約している以上に家族を含めたライフチャンスに影響を与えている可能性がうかがわれた。

研究全体を通じて、これまでの子ども・若者貧困に関する調査研究と比較して、より具体的な生活実態・家族の持つ資源や資本のあり方・ジェンダー規範の影響・社会保障制度や社会福祉サービスとライフコースとの関連を捉えることができた。また、その生活をどのような経験として受け止めているか、そのことが個々人の人生の選択とどのように関連しているかについて明らかにすることができた。総じて研究の目的であった貧困の世代的再生産における当事者理解をすすめることに一定の貢献ができたのではないかと考えられる。

今後の課題として、「子どもの生活」をどのような構造的な枠組みで捉えるのか、その検討の必要性は大きく残されていると感じる。現在、子どもの貧困対策法の施行を受けて各自治体では子どもの生活実態調査が行われているが、子どもの生活世界を把握する項目として、何が重要かという議論や検討は行われていない。当該社会に標準的な生活水準をどう子どもの問題として捉えるのか、その点を検証していくことが必要だと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

大澤真平、子どもの貧困の経験という視点、査読なし、教育福祉研究、22巻、2017、15-27
<http://hdl.handle.net/2115/67821>

〔学会発表〕(計2件)

大澤真平、生活困難層の若者の「自立」-若年女性の事例から、第34回日本生活指導学会(招待講演) 2016

大澤真平、貧困と若年女性のライフコース - 「貧困の世代的再生産」に関する継続ヒアリング調査から、第68回日本教育社会学会、2016

〔図書〕(計2件)

松本伊智朗編 大澤真平 他、法律文化社、「子どもの貧困」を問いなおす、2017、171-189

松本伊智朗編著 大澤真平 他、明石書店、遊び・育ち・経験 - 子どもの世界を守る(シリーズ・子どもの貧困2)、2019、47-70

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。